

第5章

-望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画-



2030年目標を達成するために、
5つの基本戦略(知る、学び・つながる、守る、創る、活かす)
ごとに状態目標と行動目標、成果指標を設定しました。

第5章の概要について

☆望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画についてまとめています。

構成

概要

(1) 基本戦略と行動計画の概要 (P85)

生物多様性の保全は、長期的に継続していくことが必要なことから、前戦略の5つの基本戦略「知る」「学び・つながる」「守る」「創る」「活かす」をこの戦略の基本戦略として設定しています。

(2) 各主体に期待される役割 (P87)

ここでは、この戦略を着実に進めていくために、それぞれの主体に期待される役割を整理しています。

(3) 行動計画

- ①基本戦略1「知る」(P88)
- ②基本戦略2「学び・つながる」(P90)
- ③基本戦略3「守る」(P92)
- ④基本戦略4「創る」(P95)
- ⑤基本戦略5「活かす」(P98)

5つの基本戦略ごとに、あるべき姿を示す「状態目標」と、その目標を達成するために必要な「行動目標」を設定しています。また、戦略ごとに取組や成果指標を設定しています。

第5章 望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画

5.1 基本戦略と行動計画の概要

私たちの生活に欠かせない生物多様性の保全を推進するため、生物多様性を「知る」、「学び・つながる」、「守る」、「創る」、「活かす」の5つをこの基本戦略とします。

また、分かりにくい、取り組みにくいといわれる生物多様の保全について、関心を持ってもらうきっかけとするため、市民や事業者等にも身近で関心の高い「地下水」に関連する取組について、5つの基本戦略の「リーディングプロジェクト」として位置づけます。

基本戦略	リーディングプロジェクト	状態目標
基本戦略1 生物多様性を「知る」	恵まれた地下水について知る	①熊本市の恵まれた自然環境について知っている ②生物多様性について理解している
基本戦略2 生物多様性を「学び・つながる」	地下水について学ぶ機会を持つ	①生物多様性について正しく学ぶ環境が整っている ②生物多様性の保全の推進に向けた取組が、活動団体等と連携して実施されている
基本戦略3 生物多様性を「守る」	良質な地下水を保全する	①生物が十分に生息・生育できる自然環境が保全されている ②地球温暖化が防止されている
基本戦略4 生物多様性を「創る」	豊富な地下水を育む	①生物の生息・生育地となる緑地が創出されている ②健全な生態系が回復している
基本戦略5 生物多様性を「活かす」	地下水の魅力を発信する	①熊本市の地域特性を活かしたプレゼンスが強化されている ②生物多様性のめぐみが社会課題解決に活用されている (NbS)

● 望ましい姿の実現に向けた基本戦略と状態・行動目標

基本理念

自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、熊本を、みんなで実現する

2030年目標

熊本の魅力である清らかな地下水や、豊かな緑といった生物多様性のめぐみを持続可能なものとするために、生物多様性の損失を止め、回復軌道に乗せる『熊本市版ネイチャーポジティブ（自然再興）の実現』

望ましい姿の実現に向けた基本戦略と状態・行動目標

基本戦略	基本戦略1 生物多様性を「知る」	基本戦略2 生物多様性を「学び・つながる」	基本戦略3 生物多様性を「守る」	基本戦略4 生物多様性を「創る」	基本戦略5 生物多様性を「活かす」
リーディングプロジェクト	恵まれた地下水について知る	地下水について学ぶ機会を持つ	良質な地下水を保全する	豊富な地下水を育む	地下水の魅力を発信する
状態目標	①熊本市の恵まれた自然環境について知っている ②生物多様性について理解している	①生物多様性について正しく学ぶ環境が整っている ②生物多様性の保全の推進に向けた取組が、活動団体等と連携して実施されている	①生物が十分に生息・生育できる自然環境が保全されている ②地球温暖化が防止されている	①生物の生息・生育地となる緑地が創出されている ②健全な生態系が回復している	①熊本市の地域特性を活かしたプレゼンスが強化されている ②生物多様性のめぐみが社会課題解決に活用されている(NbS)
行動目標	①熊本市の生態系や守るべき自然を把握する ②絶滅の危機にある種及び生息・生育地を把握する ③ICTを活用した情報収集や分析を行う ④生物多様性について知る ⑤企業による生物多様性に関する情報開示を推進する	①持続可能な開発のための教育(ESD)を推進する ②生物多様性に配慮した商品やサービスについて普及啓発する ③持続可能な生産・消費にするため食品ロス削減の普及啓発をする ④連携基盤であるプラットフォームを活用する ⑤様々な主体と連携した取組を進める	①絶滅危惧種を保全する取組を実施する ②健全な生態系を保全する ③人と野生動物との適切な距離を保つ ④環境への影響を考慮した開発事業を推進する ⑤脱炭素化を推進する	①生態系に配慮した緑を創出する ②ESG債など民間資金を活用する ③在来種・希少種を増やす ④生態系や自然環境に配慮した整備を推進する	①地域特性を活かした魅力を発信する ②地域特性を活かしたまちづくりを推進する ③歴史や文化を活かした観光まちづくりを推進する ④バイオマスの活用を推進する ⑤グリーンインフラやEco-DRR(生態系を活用した防災・減災)を推進する
成果指標(2030年)	水や酸素、食料や地域特有の文化などが、生物多様性からもたらされたものと知っている人の割合 32%	生物多様性について学んだことがある人の割合 32%	緑被率(維持) 32.8% 熊本連携中枢都市圏全体の温室効果ガス排出量の削減率 40%以上	地下水人工かん養量(年間) 3,000万m³ 緑被率(維持) 32.8%	生物多様性のめぐみである熊本の水(地下水)を誇りに思っている市民の割合 100%

5.2 各主体に期待される役割

ここでは、それぞれの主体に期待される役割を整理しています。2030年目標の達成、2050年の自然共生社会の実現を達成していくためには、熊本市に関わる全ての人たちが一体となって、お互いに連携しながら取組を進めていく必要があります。

(1) 熊本市

- 本市の生物多様性の状況を把握するための基礎情報を収集し、必要な情報を提供する「情報拠点」となり、生物多様性について普及啓発することで社会への浸透に努めます。
- 教育機関と連携し、生物多様性について学ぶ環境を提供します。
- 生物多様性の保全を推進するため、各主体と連携しながら取組を着実に進めます。

(2) 市民

- 生物多様性について積極的に「学び」、生物多様性を理解します。
- 生物多様性を持続可能なものとするため、「自分ごと」として捉え、日々の暮らしの中で生物多様性に配慮した行動を行います。
- 生物多様性に関する課題解決に向け、各主体が実施している取組に積極的に参加します。

(3) 市民活動団体

- それぞれの活動場所において、地域を巻き込みながら、生物の生息・生育状況の把握や普及啓発、自然環境の保全や利活用に努めます。
- 将来を担う地域の子どもたちに対して、身近な自然とふれあう機会を提供します。
- 熊本市や他の市民活動団体、事業者等と連携しながら、生物多様性の保全を推進します。

(4) 事業者

- 事業活動が生物多様性に与える影響を正しく把握するとともに、生物多様性に配慮した活動を行い、その情報について情報開示を行います。
- 生物多様性のめぐみである地域資源を活かすという視点で、地域課題の解決とともに地域の発展に貢献します。
- 生物多様性に配慮した土地利用(例:事業所敷地の緑地維持・管理等)や生物多様性の保全の取組を支援するなど、地域の生物多様性の保全に寄与します。

5.3 行動計画

本戦略では、5つの基本戦略ごとにあるべき姿を示す「状態目標」、状態目標を達成するために必要な「行動目標」を設定し、それぞれに対応した形で施策と成果指標を設定し、進捗状況が検証できるような計画としました。

(1) 基本戦略1:生物多様性を「知る」

本市には清らかな地下水や、豊かな緑などの恵まれた自然環境があり、それらは長い歴史の中で、先人たちのたゆまぬ努力により受け継がれてきました。そこで、この恵まれた自然環境を次世代へ引き継ぐため、自分の身近にある自然環境の把握に努めます。

また、生物多様性という言葉の意味を知っている市民の割合は、17.2%(令和4年度)であり、十分浸透しているとは言えません。私たちの暮らしは、生物多様性に支えられており、生活に欠かせない水や酸素など、生物多様性のめぐみで成り立っていることを理解することが重要です。そこで、そのめぐみを次世代に引き継ぐため、生物多様性の理解を深めます。

基本戦略 1 生物多様性を「知る」

状態目標	1-1	熊本市の恵まれた自然環境について知っている
	1-2	生物多様性について理解している
行動目標	1-1	熊本市の生態系や守るべき自然を把握する
	1-2	絶滅の危機にある種及び生息・生育地を把握する
	1-3	ICTを活用した情報収集や分析を行う
	1-4	生物多様性について知る
	1-5	企業による生物多様性に関する情報開示を推進する
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ■出前講座や節水市民運動の実施 ■くまもと水検定の実施や副読本を活用した教育 ■出前講座などの普及啓発の実施 ■絶滅危惧種や希少種調査の実施 ■指標種モニタリングの実施 ■ICTを活用した調査報告システムの実施 ■生物データベースの構築 ■企業による生物多様性に関する情報開示の推進(TNFD) 	
リーディングプロジェクト	恵まれた地下水について知る	
成果指標 (2030年)	水や酸素、食料や地域特有の文化などが、 生物多様性からもたらされたものと知っている人の割合	32%
関連するSDGs目標		

コラム 23 企業に求められる対応

2050年カーボンニュートラルを目指し、「脱炭素」に向けた取組が広がる中、「生物多様性」の損失を食い止め、回復させるという「ネイチャー・ポジティブ(自然再興)」志向も、国際的に高まっています。このような中、企業の活動が生物多様性にどのように関わっているかを「見える化」し、資金の流れが自然再興に貢献できるようにする取組が進められており、企業の非財務情報の開示対象として、脱炭素への対応(TCFD)に続いて、「生物多様性への対応」についても制度化(TNFD)される方向となっています。

例えば、紙パルプ、パーム油等の生産に当たって、その原料調達において森林破壊を引き起こしているといった事例を聞かれたことがあると思います。森林破壊は、水や土壌、動植物にも影響を与え、生物多様性の損失につながります。企業においては、今後、自然環境に配慮した持続可能な生産活動、もっと言えば、自然をさらに増やしていくビジネスモデルが求められることになり、投資家や金融機関は、投資や融資等に当たって「生物多様性への対応」についての開示情報を参考に、企業を選別する動きが加速していくものと思われます。

熊本では、TSMCの進出により、半導体関連産業の集積がさらに進むことが予想されます。熊本の宝である地下水への影響が課題の一つとなっていますが、この「第2次熊本市生物多様性戦略」でも、地下水に関連する取組がリーディングプロジェクトとして位置付けられています。

新たに立地する企業をはじめ各企業が、水田の水張りへの協力、雨庭[※]の設置、涵養地域で生産された米や農産物を積極的に購入するといった取組を行うことで、地下水涵養に貢献するとともに、それらを情報開示し、生物多様性に配慮しているという評価を受ければ、対外的にもサプライチェーンの中でも企業価値がさらに高まるでしょう。熊本において、そのような好循環が生まれることを期待します。

(執筆協力者:藤本聡氏・株式会社肥後銀行地域振興部 理事)

※屋根などに降った雨水を下水道等に直接放流することなく、庭に掘った穴に一時的に貯留し、地下に浸透させることで河川への流出量を抑制する技術。

(2) 基本戦略2:生物多様性を「学び・つながる」

生物多様性は私たちの暮らしの基盤であり、人々の社会活動や経済活動は生物多様性に支えられています。

そこで、生物多様性に関する理解を深め、正しい知識の習得を推進し、生物多様性に関する教育や自然体験学習などの機会拡充を図ることで、一人一人の行動変容につなげていきます。

また、生物多様性の保全のため、市民、市民活動団体、事業者及び行政など、様々な主体と連携した取組を推進します。

基本戦略2 生物多様性を「学び・つながる」

状態目標	2-1	生物多様性について正しく学ぶ環境が整っている
	2-2	生物多様性の保全の推進に向けた取組が、活動団体と連携して実施されている
行動目標	2-1	持続可能な開発のための教育(ESD)を推進する
	2-2	生物多様性に配慮した商品やサービスについて普及啓発する
	2-3	持続可能な生産・消費にするため食品ロス削減の普及啓発をする
	2-4	連携基盤であるプラットフォームを活用する
	2-5	様々な主体と連携した取組を進める
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ■田んぼハイスクールによる学習機会の創出 ■水源地見学などの実施 ■自然観察会、体験学習等の実施 ■食育の実施 ■ESD 人材の育成 ■ワンウェイプラスチック削減及びバイオプラスチック等の利用促進 ■「もったいない！食べ残しゼロ運動」の推進 ■「買すぎない、作りすぎない、食べ残さない」など、食べ物を大切にすることの啓発 ■いきもんネットを活用した連携・協働の取組実施 ■市民、活動団体、学校、企業などとの新たな連携体制づくり ■市民活動団体と連携したイベントの実施 	
リーディングプロジェクト	地下水について学ぶ機会を持つ	
成果指標(2030年)	生物多様性について学んだことがある人の割合	32%
関連するSDGs目標		

コラム 24 環境教育について～「生物多様性」を考えるきっかけづくり～

環境総合センターでは、地球温暖化、自然と生き物、水や森林など環境に関することについて、身近な環境資源を活用して、市民の皆さんに楽しく知って頂くように環境教育としての講座を行っています。当センターは、持続的な環境教育が必要との考えの基で、市民の皆さんへの周知活動を行っています。環境問題に対する関心と保全意識の向上を図り、自ら考え、行動する力を支援し、環境保全活動の実践へつなげることを目的としています。

環境教育の一環で親子野鳥観察会を主催事業として実施しています。観察会の場所は、市民の憩いの場であり、湧水の豊富な江津湖で行っています。四季を通じて水温の変化が小さく、年平均18℃前後を保っている場所が多く、生息する動植物の種類や数が多く見られるために、多くの野鳥が飛来する場所となっていますので、身近で貴重な熊本の環境資源のひとつである江津湖で観察会を行っています。

この貴重な熊本の環境資源である江津湖で、河川地域での自然としての生態系の多様性、そこに住む動植物から微生物にいたるまでの種の多様性、同じ種類でも形や模様が異なる遺伝子の多様性を見ることが出来、観察会を通じこの身近な場所がどのような環境の中で、どのような生物たちが生活しているのか、実際見て感じてこの地域の環境の現状を直接体験し、生物の多様性を通じて環境保全についての意識が持てるように活動しています。

他に「水生生物ウォッチング」も江津湖で実施しています。肉眼では観察が難しい水中の小さな生物たちは、ルーペを使って観察します。観察の中で、参加する一人ひとりの方に、個人で・家族で・学校で・職場で・地域で等のそれぞれの単位にて自ら出来る水質保全の取組についても考えて行動して頂くような問いかけも行っています。

市民の皆さんが暮らしている地域でも、野鳥や魚類や小さな水生生物などの生き物のつながりを考え、熊本の自然保護の意識を持つ「きっかけづくり」となるよう今後も講座を通して「生物多様性」について情報の発信を行いたいと思っています。

～江津湖で見られる鳥たち～



～江津湖で見られる水の中の小さな生物たち～



(3) 基本戦略3:生物多様性を「守る」

本市には、様々な場所に絶滅危惧種が生息・生育しており、特にこうした生物の生息・生育地の保全に努めることが重要です。そこで、絶滅危惧種の生息域外保全に取り組むほか、絶滅危惧種だけでなく様々な生物の生息・生育地となる多様な環境の保全に努めます。

また、近年増えている豪雨などによる自然災害は気候変動が原因と言われています。気候変動は生物多様性の損失をもたらす主要な要因の一つであり、地球温暖化により生息地の縮小や劣化を引き起こしています。そこで、地球温暖化の原因となっている温室効果ガスの削減に向け、環境に配慮しながら、再生可能エネルギーの利用及び省エネルギーの推進に取り組みます。

基本戦略3 生物多様性を「守る」

状態目標	3-1	生物が十分に生息・生育できる自然環境が保全されている
	3-2	地球温暖化が防止されている
行動目標	3-1	絶滅危惧種を保全する取組を実施する
	3-2	健全な生態系を保全する
	3-3	人と野生動物との適切な距離を保つ
	3-4	環境への影響を考慮した開発事業を推進する
	3-5	脱炭素化を推進する
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ■地下水質の常時監視、硝酸性窒素対策 ■絶滅危惧種の生息域外保全の実施 ■特定外来生物の駆除 ■緑地・森林の適切な保全・管理 ■街路樹再生整備の推進 ■野生鳥獣による農水産物被害及び生活被害の防止 ■愛玩動物の適正飼養の推進 ■環境影響評価制度を構築し、周辺環境に配慮した開発事業の促進 ■生物多様性に配慮した再生可能エネルギーの利用及び省エネルギーの推進 ■公共交通や自転車の利用促進 ■市電線のじゅうたんの維持管理 	
リーディングプロジェクト	良質な地下水を保全する	
成果指標 (2030年)	緑被率(維持)	32.8%
	熊本連携中枢都市圏全体の温室効果ガス排出量の削減率	40%以上
関連するSDGs目標		

コラム 25 生息域外保全～絶滅から救うために動植物園で飼育する～

本来の生息域内で野生生物の保護を行うことを「生息域内保全」といいます。しかし環境汚染などにより生息域内での保全が不十分なことがあります。そこで、野生生物の一部又は全部を動物園などで飼育し保全する必要があります。これを「生息域外保全」といい、野生生物の飼育・繁殖技術を蓄積させてきた動物園などにその担い手としての期待が高まっています。

熊本市動植物園でも生息域外保全の一環として、絶滅の恐れのある動物を飼育・繁殖しています。一口に繁殖といっても簡単ではなく、その動物の生態を考え、他の動物園などから情報を収集し、計画を立て、試行錯誤を繰り返し、ようやく繁殖へたどり着きます。最近では、チンパンジー(令和4年)、レッサーパンダ(令和5年)、スダスローリス(令和4・5年)、ミヤコカナヘビ(令和6年)の繁殖に成功しました。その他にもクロサイ、マサイキリン、タンチョウ、トサシミズサンショウウオなどの繁殖を目指しており、これらの動物を絶滅から救うことに貢献したいと思っています。

生息域外保全の取り組みの一つに普及啓発があります。私たちは、これらの動物がなぜ絶滅の恐れがあるのかを多くの方に知っていただき、何ができるのかを考えていただきたく、ガイドや啓発パネルなどを通じて発信しています。また、生物多様性の素晴らしさについても実感していただければと思い、近縁種を隣同士に配置するなどの工夫もしています。このような私たちの思いを感じながら動植物園を楽しんでいただければ嬉しく存じます。



令和4年3月に誕生したチンパンジーのレン(中央)



令和5年6月に誕生したレッサーパンダの杏香(左)



レッサーパンダの絶滅の恐れについて話す職員



鮮やかな緑と長い尾が特徴の沖縄県宮古諸島にのみ生息するミヤコカナヘビ(左)。

その隣には私たちの身の回りに生息するニホンカナヘビ(右)を展示。生物多様性を来園者に実感してほしい。

コラム 26 人間がイノシシの「えづけ」をしている？

みなさんは、みかん畑や田んぼの周りに電気柵や金網柵が張り巡らされているのを見かけたことはありませんか。これらはイノシシなどの野生動物から農作物を守るために設置されたもので、わなによる捕獲活動などと併せて対策が進められた結果、熊本市内におけるイノシシの農作物被害額は平成 23 年度(2011 年度)をピークに減少しています。

その一方で、市内でのイノシシの生息域は拡大傾向にあるとみられ、これまで被害のなかった地区で被害が発生したり、住宅地で出没したりするようになってきました。この原因の一つには、集落や住宅地の周辺で管理の行き届いていない山林や竹林、樹園地などが増え、それらがイノシシにとって安全な「隠れ家」や「えさ場」になっていることが挙げられます。

人間が直接えさを与えなくても、取り残した農作物や生ごみなどは野生動物から見れば豪華なえさであり、このような「えづけ」によって、まちのえさの魅力に取りつかれたイノシシは山での生活に戻れなくなってしまいます。イノシシと人間との適切な距離を保つためには、意図しない「えづけ」をやめるなど、地域ぐるみで周辺環境を見直していくことがとても大切です。

(4) 基本戦略4:生物多様性を「創る」

過去に類を見ない速さで損失を続ける生物多様性を回復させるため、生物の生息・生育地となる緑地を創出するほか、民間資金を活用した緑化の推進に取り組みます。

また、健全な生態系を回復させるため、公園、河川、道路等において、できるだけ生物多様性に配慮した整備や再整備、管理に取り組みます。

基本戦略4 生物多様性を「創る」

状態目標	4-1	生物の生息・生育地となる緑地が創出されている
	4-2	健全な生態系が回復している
行動目標	4-1	生態系に配慮した緑を創出する
	4-2	ESG 債など民間資金を活用する
	4-3	在来種・希少種を増やす
	4-4	生態系や自然環境に配慮した整備を推進する
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ■水源かん養(水田湛水、かん養林の整備・保全)の実施 ■有効率向上のための上水道管の整備 ■樹木植栽補助金による緑化支援 ■放置竹林対策・耕作放棄地対策への活動支援 ■自然共生サイト(日本版 OECM)の取組推進 ■ESG 債の促進(グリーンボンド) ■市民、事業者と協働で取り組むネオグリーンプロジェクトの推進 ■ふるさとの森基金の活用(環境保護地区) ■希少種に配慮した維持管理の取組推進 ■(再掲)特定外来生物の駆除 ■環境保全型農業の推進 ■生態系や自然環境に配慮した水路整備 ■生態系や自然環境に配慮した河川改修 	
リーディングプロジェクト	豊富な地下水を育む	
成果指標(2030年)	地下水人工かん養量(年間)	3,000 万 ³
	緑被率(維持)	32.8%
関連する SDGs 目標		

コラム 27 NEO GREEN PROJECT(花と緑のまちづくり)とは？

熊本市には、地域の皆さんがお花を植え、手入れされている道路の植栽帯や公園の花壇などをはじめ、個人のお宅や事業所等でお世話を楽しんでおられるお庭や花壇がたくさんあります。

このような皆さんの参画と協働による花や緑に関する取組を広げ、花や緑を楽しみ、親しみを持ち、身近に感じられる活動や催し等の緑化活動を総称して「NEO GREEN PROJECT」として展開しています。

地域の活動拠点である公園などでは、子供たちと一緒に球根やお花の植付けを行い春の風景づくりに参加してもらい、花や緑に触れる機会を作るとともに地域活動へ子ども達が参加するきっかけ作りに繋げています。

また、個人のお宅や事業所などのお庭や花壇を舞台として紹介し、皆さんに巡っていただく「くまもとオープンガーデン」を開催しています。ここでは参加オーナーと訪問者がお花を通じたコミュニケーションにより、新たな交流や情報の交換などが行われています。

このほか、辛島町周辺における宿根草を中心としたスポンサー花壇のボランティアによる管理など、スポンサー企業やサポーターの皆さんからの支援による運営を行っており、このような活動を継続し、みどりに愛着を感じ、花いっぱいのもちづくりを進めています。



オープンガーデン



球根植付(球根投げ)の様子



春の花壇の様子

コラム 28 鶯川における多自然川づくりの取組

鶯川は、熊本市の東部に位置する緑川水系の1級河川(流域面積 2.82km²、流路延長 1.68km)で、沿川には市街地が形成されており、住宅地内を貫流する典型的な都市河川です。

本市では、鶯川の河岸に沿って両岸に邸宅が建ち並んでおり、河川全体に親水空間を創出することが困難な中、環境省レッドリストに掲載されているミナミメダカやヤマトシマドジョウが確認されていることから、局所的ではあるものの、緩傾斜の自然護岸や遊歩道を整備するとともに、水際の生態系や自然環境に配慮した河川整備を行っております。

このような整備を行った区間においては、地域住民によって組織された「鶯川再生いきいきボランティア」によって、河川の清掃・除草活動とともに、ゲンジボタルの保全活動が行われており、ホタルの生息地としての良好な水質環境が保たれています。

また、付近の小学校では、ゲンジボタルを環境学習の教材として利用することで、地域のボランティアとの交流も生まれています。

今後も、地域住民の憩いの場となるような親水空間の創出を目標に、生物多様性に配慮した川づくりを行います。



生物多様性に配慮した鶯川



ホタルの一生

(5) 基本戦略5:生物多様性を「活かす」

生物多様性は、酸素や水、食料などのほか、地域の祭りや伝統文化など、私たちの暮らしに様々なめぐみをもたらしています。私たちが、将来にわたってそのめぐみを受け続けていくためには、これらの地域資源が生物多様性からもたらされたものであると認識する必要があります。

そこで、豊富な地下水や農水産物のほか伝統文化など、生物多様性のめぐみである地域資源を活かしたまちづくりや農水産業の推進、観光の振興を図っていきます。

基本戦略5 生物多様性を「活かす」

状態目標	5-1	熊本市の地域特性を活かしたプレゼンスが強化されている
	5-2	生物多様性のめぐみが社会課題解決に活用されている(NbS)
行動目標	5-1	地域特性を活かした魅力を発信する
	5-2	地域特性を活かしたまちづくりを推進する
	5-3	歴史や文化を活かした観光まちづくりを推進する
	5-4	バイオマスの活用を推進する
	5-5	グリーンインフラや Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)を推進する
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ■豊富な地下水や農水産物を通した国内外への魅力発信 ■温泉や竹林などの地域資源を活用したまちづくり ■地域特性を活用した観光振興 ■熊本城や地域のお祭りといった歴史と文化の継承 ■環境工場でのバイオマス発電や熱エネルギーの活用 ■街路樹植栽スペースの雨水貯留機能の活用 ■健全な森づくりの推進 	
リーディングプロジェクト	地下水の魅力を発信する	
成果指標(2030年)	生物多様性のめぐみである熊本の水(地下水)を誇りに思っている市民の割合	100%
関連するSDGs目標		

コラム 29 『肌を潤し、笑顔いろどる～植木温泉～』

熊本市の「奥座敷」、植木温泉。

合志川の清流沿いに位置する植木温泉は、熊本市で唯一、宿泊ができる温泉旅館街。

開湯から約 130 年の歴史をもち、西南の役で傷を負った兵士たちの体と心を癒したという伝説も残る。

市街地から車で約 40 分のところにあるのどかな風情の温泉街には十数軒の湯宿が立ち並び、それぞれに趣向を凝らしたおもてなしで、地元住民をはじめ観光客を出迎え、身も心も癒している。

源泉かけ流しの天然温泉は、アルカリ性の泉質で、美容液のように肌にまとわりつくトロトロとした質感。ピーリング効果も高いため、「美肌の湯」「美人の湯」と言われており、「肌がしっとりツルツルになる」と好評。

また、湯宿ごとに泉源が異なることから、一つの宿に泊まるだけでなく、旅館ごとに異なる泉質を楽しむことができる温泉巡りもおすすめ。温泉街には温泉ソムリエが常駐しているため、温泉の知識を深めることもできる。

この植木温泉は、植木エリアに住む人々にとって親しみ深い地域資源であり、本市にとっても魅力的な観光資源であることから、地域住民をはじめ、地元企業や行政等が一体となって取り組むまちの清掃活動や季節にあわせたイベントの開催など、人と人が交流できるコミュニケーションの機会の創出など行っている。

地域一体となって植木温泉および植木エリアを盛り上げることで、温泉の効能に加え、笑顔がもたらす効果も引き出し、楽しく安心して暮らせるまちづくりに寄与するとともに、地域の活性化に繋げる取り組みを進めている。



植木温泉看板



植木温泉パンフレット



植木温泉みすと



植木温泉夜市



WA のあかり



植木温泉出前手湯・足湯

